「かける」「ひく」「おろす」とはどういう意味なのか、その子どもに説明してもらいました。つたない説明ではありましたが、具体物を通して実感を伴っていることも手伝って、教師が一方的に教えるよりも子どもたちの理解が深まったと感じました。時間の制約上、いつもこのような授業ができるとは限りません。学年で相談し、単元を決めてこのように「？」から始まり、それをみんなで考えて発表し、途中でわからなくなったら、また別の子が説明するといった「聴いて→考えて→つながる授業」を行っていきたいと考えています。

三　表現力の育成

つながっていく授業を行う際に必要になってくるのが「話す力」です。聴き手の方を見て話す、はっきり話すなど話し方のルールを全クラスに掲示し、ルールに立ち返ったり、黒板の隅に「聴き手を見る○」などと評価を記入したりして発表力の向上に取り組んでいます。

もう一つ、本年度力を入れて取り組んでいるのが「ノート指導」です。まず、下敷きをしいて日付やページをきちんと書くことを低学年の間に徹底するようにしています。そして学年が上がるにつれてノートは黒板を写すだけでなく、自分の考えを書いていくものであるという意識づけをしていきます。繰り返しこまめに指導し、「書く力」をつけていきたいと思っています。

表現力が大切な理由は、説明したり、書いたりすることにより自分の中で知識が再構築され、自分の考えが明らかになったり、思考が深まったりするからであると考えています。しかし、全ての子どもがみんなの前で上手に説明できるようになるのはなかなか難しいことです。そこで、ペア学習やグループ学習を取り入れ、自分がノートに書いた考えを少人数の中で発表し、わからない所を教え合うといった活動も大切にしています。そうすることにより、全ての子どもたちが授業に参加し、「共に学ぶ姿勢」を育んでいきたいと考えています。

四　授業の基盤となるもの

どのような授業でも、その基盤となるのは「仲間づくり」です。発表しても聞いてくれない、まちがったらばかにされるようなクラスでは安心して発表することができません。よい仲間づくりのために「良い所見つけ」を行ったり、「温かい言葉を増やしていこう」といった呼びかけを行ったり、各クラスで様々な取り組みが行われています。また、「まちがいは教室の宝物」「良いまちがいは花丸」というようにまちがいを否定しない言葉かけも大切にしています。

おわりに（地域と保護者に支えられて）

毎年六年生の子どもたちを対象に行われるアンケート「学校で友達と過ごすのが楽しいですか」という問いに対して、約八八％の子どもたちが「楽しい」と答えています。この数字は毎年同じような割合で推移しており、常に全国平均を上回っています。これは、私たち教職員にとって大変うれしいことです。しかし、これは学校だけの力で成しえることではありません。子どもたちを支えてくださる保護者と地域の存在があるのです。子どもたち同士がぶつかって、一方の子どもがけがをしてしまい保護者の方に連絡したところ、「うちの子より、相手のお子さんは大丈夫でしたか」とおっしゃいました。温かい心遣いに胸が熱くなりました。また、地域の皆さんは、子どもたちが登下校中にけがをしたり、気分が悪くなった時には、必ず助けてくださいます。近隣の会社、お店の方の中には、朝学校の周りを掃除してくださったり、校門の前にきれいなお花を植えてくださる方もいらっしゃいます。子どもたちは、保護者や地域の皆さんに見守られ温かい心をもって成長しています。皆さんへの感謝の気持ちを忘れず、子どもたちの健やかな心と体、そして学力を育んでいくことに、更に努めていきたいと思います。

（教諭　杉木　恭江）